

文学作品を通して他者理解の変遷を学ぶということ

—英国文学の授業から—

丹 羽 佐 紀 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

Gaining a transitional understanding of others by reading literary works: A practical approach in British literature classes

NIWA Saki

キーワード：他者、理解、文学作品、アイデンティティ、関係

はじめに

近年、学校現場では、生徒に読書習慣をつけさせることを目的とした読書タイムが広く導入されている。推奨されるジャンルには、いわゆる文学作品と呼ばれる類の著作も含まれると思われるが、これが大学を中心とした高等教育機関となると、なぜかその必要性が軽視されるという矛盾した現象が起きている。人間形成という視点で捉えるならば、幼少期から読書をするのがなぜ大切なのかという問いかけは、一人の人間が成長するいずれの過程においても等しくなされるべきであるのに、いつの間にか実践力という名目のもとに忘れ去られてしまっている。

近年叫ばれているコミュニケーション力とは、単に言葉が流暢に操れるとか、饒舌であることを指すのではない。根底にあるのは人と向き合う誠実さ、すなわち、今自分が目の前の他者と関わっているという当たり前のことをどれだけきちんと認識出来るのか、それを反芻し、確認出来る力のことを指すのである。同時に、他者との相互関係を意識しつつ、その中で揺らぐことのない己の部分を明確にすることによって初めて、コミュニケーションは成り立つ。そして、人と人が関わり合う上で生じてくる、複雑に絡み合った様々な要素を理解し、受けとめ、また止揚するために、文学作品を通してそれら無限のパターンの片鱗を自らの中に蓄えておくことは、生きていく上で大変重要である¹と考える。

本論では、以上のような基本的認識の上に立ち、他者理解を目的として文学作品を読む時、具体的にどのような観点からその作品に取り組みばよいのか、その手がかりを例示する。特に英国文学関連の授業において、現代が抱える社会的諸問題と関連づけながら、各々の作品が示唆する「他者」のテーマを同時に追求していく試みを具体的に示すことによって、現代の学生が「他者」を多面的に捉えつつ己を能動的に発信してゆく未来につなげたい。

グローバル化とアイデンティティ —植民地主義の時代を「読む」—

グローバル化とアイデンティティについて自分の中でどのように折り合いをつけるのかという問題は、情報が瞬時に世界を駆け巡る現代において、改めて個々に問われる問題である。表裏一体と

も言えるこの二つの側面は、ともすれば情報過多の世界で、いったん力を得て膨張した特定の言葉の勢いに流され、個を埋没させる危険性を孕んでいる。勢いを得た一つの言葉や概念は、「自」と「他」の境界にある種の麻痺を起こさせる。それは過去の歴史において既にしばしば見られた現象であり、文学作品においても例外ではない。しかし脱構築という概念が浸透して以降、少なくとも様々な現象を多面的に見直すという作業が積極的に推奨されるようにはなった。

過去からの学びを前提として、英国文学関連の授業では、外部から入ってくる文字や映像を一元的に捉えるのではなく、そこに潜む語られない部分、もしくは語りの中に組み込まれた潜在的背景を読みとることによって、作者が無意識のうちに表出させた「他者」の存在を意識するよう学生に促す。まずアイデンティティというキーワードに即して作品を取り上げるならば、むしろ自国の文化や価値観を伝える文字という手段を持たなかった民族たちの、それ故にアイデンティティ獲得という点で最も危機的な歴史状況に晒された人々を代弁する存在として、しばしばシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の *The Tempest* (1611) に登場するキャリバンが引き合いに出されることは注目に値する。²

英国文学史上に名を連ねる作品の多くは、ヘンリー 8 世の時代から急速に発展したイングランドの海外植民地政策と、多かれ少なかれ接点を持つ。16 世紀半ばから勢いを増したイングランドの海外進出は、いわゆる大航海時代を経て国内外に有形無形の影響をもたらし、人々のアイデンティティ形成のプロセスに食い込んでいった。シェイクスピアの劇作品を紐解くと、エリザベス 1 世を中心とする時代が要請した国民意識の高揚を、プロパガンダ風に顕在化させた側面があったことは確かである。しかしキャリバンという登場人物が持つ特異性を考える時、少なくとも現代の視点から作品を捉え直すことが出来る我々は、彼の悲痛な台詞が意味する内容をもう少し別の角度から解釈することが可能であるし、そうしなければならない。作品に潜む見えない「他者」が過去から語りかける時、それは同時に、現代に生きる我々は、同じように特殊な環境に置かれた「他者」をどう考えるのかという問いを、新たに発信していると捉えられるからである。

授業で「作者の立場に立って考えてみよう」と問いかける時、作品に描かれた場面は、作者を取り巻く社会状況を絶対普遍的に映し出すものではないということをまず指摘する。当たり前の事なのだが、読書に慣れていない場合、書かれたことをそのまま鵜呑みにすることも考えられるからである。キャリバンは、もちろん基本的には植民地支配者の側であるイングランドの視点で描かれている。グロテスクにデフォルメされた外貌、ミランダを凌辱しようとする野蛮性、それらは、イングランドという国に属する観客たちにとっては、彼らの世界と全く異なる未知の世界、すなわち島という異界に生きる絶対的な「他者」を表象する。そしてプロスペローやミランダとキャリバンの主従関係は、言語を持つか持たないかという点にその決定的な優劣の根拠が与えられている。キャリバンはそれを皮肉り、言語を教えてもらったが故にその言語を使って相手を貶めることが出来ると言う。

ミランダ：私も初めは哀れに思って、物が言えるようにと

丹羽 佐紀：文学作品を通して他者理解の変遷を学ぶということ

色々苦心したり、暇さえあれば、何か彼か教えてあげました。

・・・

お前に心に思う事を言い表す

言葉を教えてあげたのは私・・・。

キャリバン：お前さんは確かに言葉を教えてくれた、お陰で大助かりだ、

人に悪態つく事を憶えたものな、疫病に取憑かれてくたばってしまうがいい、

それが俺に言葉を教えた罰さ。

(1 幕 2 場 355-367 行)³

このように言い返すキャリバンは、支配者プロスペローに懲らしめられる。しかしここには、キャリバンという一人の登場人物が代弁してみせる数え切れないほどの「他者」が背後に存在するという事実が暗示されている。言葉にならなかった故に聞こえてこなかった声を、キャリバンの台詞を手がかりとして推し量る作業は、文学作品における「他者」理解の方法として非常に重要なのである。支配者側によってイメージされた姿を借りて、そこからアイデンティティ奪還を叫ばざるを得ないキャリバンを、我々は見る。エドワード・サイードは「テキストを読むにあたって人は、何がテキストに入り込んでいるのかということと、作者が何をテキストから排除したのかということの両方に関連させて読まなくてはならない」と述べている。(79)⁴ 人は、「作品の中で沈黙させられたもの、周辺に位置づけられたり、イデオロギー的に表象されてしまったもの・・・を、表に引き出し、広げ、また強調し、さらにそれに声を与えるよう努力しなければならない。」(78)

おそらくアイデンティティを主張する数え切れないほどの架空の「言葉」が、過去には存在したと考えられる。それらを理解することは困難かもしれないが、理解しようと努めること、理解への手がかりを探ろうとする姿勢は必要であろう。キャリバンの台詞は、現在よく耳にするグローバル化という言葉が、実際には言葉が飛び交うほどに単純なものではないということをも示唆していると言える。

繁栄社会と労働者問題 ―ヴィクトリア時代の作品を中心に―

産業革命により歴史上類を見ない技術的發展を遂げた 18 世紀以降のイングランドは、それと同時に各地で様々な労働問題を引き起こした。現代の日本においても様々な所で明るみに出されるブラックバイトやハラスメントの問題は、物質的繁栄や功利性の追求が常に何らかの歪みや軋みを引き起こす社会構造の普遍性を我々に突きつける。

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-1865) の小説は、このような労働問題を、特に雇用主と労働者の複雑な関係に焦点をあてて鮮明に描き出している。またそこから、雇用主と労働者という社会構造的差異の壁、互いに歩み寄れない「他者」に対する壁を何とか打ち破ろうとした時、どのような犠牲が払われなければならないのか、また虐げられた労働者たちのやり場のない怒りを、人間に与えられた理性という賜物を最大限重んじることによって必然的に生まれた労働組合 (trade union) の意義を、現代へのヒントとして与えてくれる。読者としての我々はそこから、大英

帝国が生み出した社会構造の一端を知識として会得し、繁栄社会における「他者」理解の一つの手がかりを得ることが期待できるのである。

ギaskellの『メアリー・パートン』(*Mary Barton*, 1848)『北と南』(*North and South*, 1854-55)は、産業技術の発展がもたらした格差社会のいびつな問題を、男女の恋愛を織り交ぜながら鮮明に描写している。雇用主と被雇用者である労働者の立場の厳然とした差が、非情なまでに惨めな生活困窮を後者にもたらす。働いても一向に良くならない生活状況は、人々の心も荒廃させ、蝕んでいく。マンチェスター郊外の町を舞台として描かれた『メアリー・パートン』では、労働者たちは、やり場のない憤怒をついに爆発させる。「機械は貧乏人の破滅のもとだ」(“Machines is th’ ruin of poor folk” (85))と叫ぶ労働者たちの叫びは切実である。だがその矛先は、単に自分を理解してくれない「他者」としての雇用主へではなく、雇用主もまたその中に絡めとられているところの、もっと深い社会の暗部に向けられるべきであることを、ギaskellは逆説的に描いてみせる。ジョン・パートンは、切々と訴える。「俺たちが賃金をあげると頼む時、そんなものを求めているんじゃないだろう？

ごちそうが欲しいわけじゃない、ただ腹いっぱい食べたいんだ。・・・俺たちだけじゃなく、突き刺さるような風の中で俺たちに寄りかかって、どうしてこんな世で苦しむよう自分を生んだのかと目で問う哀れな子たちを風雨や嵐から守ってくれる屋根がほしいんだ。」(16章)⁵だが一方、ジョンに息子を殺されたカースン氏も、次のように呻く。「頭が白くなるまで私が苦しまなかったというのか。・・・息子に対する数々の希望をいつも胸の中心に抱き、今の年まで私が苦勞してこなかったとでも言うのか。」(35章)彼らの双方が苦しまなくてはならなかった理由を、彼らの個々の言動に見出そうとするのは困難であろう。

授業でこの作品を読むにあたっては、ギaskellが、それぞれの立場から互いに相手を理解し合えなかった「他者」たちの悲劇を描かずにいられなかった強い動機は何なのか、自分なりに分析するよう学生に促す。労働の意味、利潤追求が人間的感情に及ぼす影響、「他者」への眼差し、乗り越えられる障壁の可能性、また労働組合の必然性など、現代社会における様々な労働問題と関連づけながら、「他者」をキーワードとした内容理解を深めていくことが求められる。

自分の中に在る「他者」と向き合う ― 20世紀に入ってから―

二つの世界大戦以降、英国文学のジャンルにおいて少なくともある一定の傾向が見られるようになった。ポーランド出身のジョゼフ・コンラッド(*Joseph Conrad*, 1857-1924)に始まり、特にジェームズ・ジョイス(*James Joyce*, 1882-1941)やヴァージニア・ウルフ(*Virginia Woolf*, 1882-1941)に代表される「意識の流れ」(*stream of consciousness*)をテーマとして作品を発表した作家達の出現である。彼らは外へ向けられた「他者」意識を描き出すと同時に、自己の内部に在る「他者」、すなわち表向きの自分とせめぎ合い、決して折り合うことのない「他者」の存在を浮き彫りにし、人間の内部における分裂とアイデンティティの問題を読者に提示した。

ジェームズ・ジョイスの*Dubliners* (1914)は、ダブリンという都市に住むごく平均的な人々の日常生活における内面を描く。「小さな雲」(“A Little Cloud”)において、ダブリンに住むチャンドラー

は、いつか偉大な詩を書き、ロンドンに出て成功することを夢見ている。家庭の雑事に追われる自分の日常をいつか脱け出すことを望み、それを実現させている友人ギャラハーに内心コンプレックスを感じている。しかし彼は妙なプライドからそれを表に出そうとしない。ギャラハーは、窮地に陥った時ですら「おれはいまハーフ・タイムだよ」と言い放つ不敵さを持っている。そのような友人の態度に刺激され、チャンドラーは次のように妙な気分を感じる。

彼は生れてはじめて、行きずりの人々に優越感を覚えた。ケイペル街の活気がない野暮臭さに、自分の心がはじめて反感を催した。つぎのようなことに間違いはない、成功せんと思う者はすべてからく外へ出よ。ダブリンにいては何もできない。グラタン橋を渡りながら、河の、下の河岸の方を見おろして、小さな、いじけた家々を哀れに思った。⁶

チャンドラーは、自分という人間を育んだ故郷の街を軽蔑の眼差しで眺め、自分はこんな古びた街を脱して人生で成功を収めるのだという野望を抱く。彼の夢想の世界には、今の自分とは比べものにならないほど輝かしい「他者」としての自分が存在する。

だがこの英雄的な「他者」は、子供に泣き叫ばれて「黙れ!」と癇癇を起したチャンドラーが、ショックで痙攣をおこした子供に慌てふためき、妻に叱られるという情けない現実に戻されて消える。自分の中に離れ難く存在する故郷の足枷が、気がつくともこれほどまでにチャンドラーの現実を支配している。誰が引きとめるでもなく、彼自身の中に己を引きとめ、そこから脱出させない枷があるということを、作者は否応なく浮き彫りにしてみせる。故郷は自分を、もしくは自らのアイデンティティを支えてくれる存在かもしれないが、同時に枷ともなり得る。チャンドラーが、故郷を出て行った友人を眩しく感じ、自分を劣っているかのごとく捉えるのはなぜだろうか。そして物語の最後で、泣く子供を見つめながら「悔恨の涙」(“tears of remorse” (81))を流すのはなぜだろうか。人によっては認め難いかもしれないが、チャンドラーの意識の流れを追いながら、授業では、自己形成と故郷の関わり方について改めて考える。

もう一つの例を挙げる。2014年4月に起きたセウォル号沈没事件は、200人を超える死者を出す惨事となったことは記憶に新しい。⁷この事件において、乗組員の対応が非難されたという背景をヒントに、自分の中にある「他者」のテーマを英国文学の授業で提起出来るのが、ジョゼフ・コンラッドの*Lord Jim* (1900)を通してであろう。この作品では、人間の中にあるいわば自己防衛本能が、職務放棄という行動をジムに咄嗟に起こさせてしまう。ジムは、パトナ号の乗組員であるにもかかわらず、沈みゆく船から脱出し、乗客を見捨ててしまう。いつか立派な航海士となり、いわば海の英雄になることを理想としてきた彼を待ち受けているのは、外部からの非難と、自分の行動を受けとめ切れない状況が己自身を慄かせる、二重の苦痛である。ジムの苦しみを、事件において「他者」であったマーロウが語りによって掘り下げていく。ジムはさらに、自分が犯した罪だけでなく、そのことで外部からの非難に圧されてしまう己への不安という苦痛とも闘わなくてはならない。小説の最後において、果たして彼の罪が彼自身の中で贖われたのかどうか、解釈は分かれるところであ

ろう。

授業では、「自分の命を守ろうとするのはいけないことなのか？」という問いかけから始め、犠牲的精神と自己防衛本能との葛藤について議論する。答えを出すのは難しいかもしれないが、少なくとも、議論の際に「自分が知らなかった自分」が存在する可能性、またそのような自分がいつ突然顔を出すかわからないことを認識し、その時自分はどうするのかと自問することは出来る。自分の中の潜在的な「他者」について考え、その「他者」が、時にジムのように人生を左右するかもしれないということに思いを馳せれば、己の未知の部分を知るきっかけとなろう。

終わりに

日常生活において数え切れないほど「他者」との関わりがある中で、自分という人間をどこに位置づけるべきかについて、人はしばしば無意識のうちに頭を働かせる。そして「他者」への意識が己への気づきにもつながる。文学作品には、そのような様々な場面における人物の在り様や「他者」への働きかけ方が、凝縮された形で描写されているだけでなく、その描写によって「描写されなかった」側面も表出させる力がある。また時代が移り変わるにつれて、その表現方法も変化を遂げる。その変遷を、文学の授業において可能な限り辿っていくことは、現代という時代にあって「他者」理解のために意義あることと考える。登場人物たちは、読み手の現実世界にいないが故に、彼らと関係のない遠い世界にいないのではない。むしろ現実世界にいないからこそ、読み手はその凝縮された内容を自らの内部で新たに捉え直し、作者を含む「他者」と己の双方の発見へとつなげることが出来るのである。

注)

1. 文学作品とひと口に言っても、そのジャンルはさらに細分化されるべきであることは言うまでもない。またそれぞれが読み手に働きかける機能も当然ながら違ってくるものである。例えば大江健三郎は、『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』の中で、詩と小説が読み手に与える影響力の違いについて、その「言葉」が持つ本質的な機能の違いに焦点を当て、「金属の比喻」を用いて説明している。(13-15)
2. *The Tempest* を植民地主義政策と結びつけて解釈することは、シェイクスピア批評史の上では既になりに行われている。ただ、それぞれの場面や台詞が何を表象するかについては、今なお新たな試みが続いていると言える。スティーブン・J・グリーンブラットは、言語と植民地化の関係について、新世界(New World)を例にとって説明している。(Learning to Curse, 16-39) またプロスペローが最終的に魔法を捨てる場面に、「罪の赦しと自由」(“indulgence and freedom”)のテーマを読み取る。(Shakespearean Negotiations, 157) 彼はまた、新大陸の発見が西洋の人々の意識の中で、いかにごく自然に占有という概念と結びつけられたか、物語構造のからくりという観点から説明している。(Marvelous Possessions, 52-85)

3. Miranda: I pitied thee,
Took pains to make thee speak, taught thee each hour
One thing or other. . . .
Caliban: You taught me language; and my profit on't
Is, I know how to curse. The red plague rid you
For learning me your language! (*The Tempest*, I. ii. 355-367)
日本語訳は福田恆存訳（新潮文庫、1984 年）を用いた。
4. “In reading a text, one must open it out both to what went into it and to what its author excluded.” (79)
“We must therefore read the great canonical texts . . . with an effort to draw out, extend, give emphasis
and voice to what is silent or marginally present or ideologically represented . . . in such works.” (78)
日本語訳は私訳。
5. “For, brothers, is not them the things we ask for when we ask for more wage? We donnot want dainties,
we want bellyfuls; . . . we want a roof to cover us from the rain, and the snow, and the storm; ay, and not
alone to cover us, but the helpless ones that cling to us in the keen wind, and ask us with their eyes why
we brought ‘em into th’ world to suffer?” (182)
“Have I had no inward suffering to blanch these hairs? Have not I toiled and struggled even to these
years with hopes in my heart that all centred in my boy?” (352)
日本語訳は私訳。
6. “For the first time in his life he felt himself superior to the people he passed. For the first time his soul
revolted against the dull inelegance of Capel Street. There was no doubt about it: if you wanted to
succeed you had to go away. You could do nothing in Dublin. As he crossed Grattan Bridge he looked
down the river towards the lower quays and pitied the poor stunted houses.” (68)
日本語訳は安藤一郎訳（新潮文庫、1982 年）を用いた。
7. 2014 年 4 月 16 日に、韓国珍島沖で起きた旅客船の沈没事故。

参考文献

- Conrad, Joseph. *Lord Jim*. Ed. Jacques Berthoud. Oxford: OUP, 2002.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Ed. Shirley Foster. Oxford: OUP, 2006.
- Greenblatt, Stephen. *Learning to Curse*. London: Routledge, 1990.
- , *Marvelous Possessions: The Wonder of the New World*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- , *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare*. Chicago: The University of Chicago, 1980.
- , *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*. Berkeley: University of California Press, 1988.

Joyce, James. *Dubliners*. Intro. Terence Brown. London: Penguin Books, 2000.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. London: Vintage Books, 1994.

Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. Frank Kermode. London: Routledge, 1988.

大江健三郎『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』新潮文庫、2011年